

殘花聚園 (三)

(日本幼児教育史資料)

東京女子高等師範學校教授 石川 謙

三 貝原益軒の育児意見(一)

益軒はその『和俗童子訓』の中で、幼児から少年へ生長し行く子供の年齢の發達に伴つて、それ々の時期にふさはしい教育方法を編み出したので有名な學者である。寛永七年十一月十四日(西曆一六三〇)に福岡城内に生れ、正徳四年八月二十七日(西曆一七一四)に福岡城外の自邸に歿した。享年八十五である。その『和俗童子訓』を編んだのは寛永七年であるから、彼八十一歳のことである。先づ此の書の「總論」に見えてゐる育児意見の一端を紹介して見よう。

「凡そ小兒を育つるには、始めて生れたる時、乳母を求むるに、必ず溫和にして慎み、まめやかに詞少き者をえらぶべし。乳母の外、付き隨ふ者をえらぶも、大やう斯の如くなるべし。始て飯を喰ひ、ものを言ひ、人の面を見て悦びいかる色を知る時より、常に其の事に隨ひて、時々教ふればやゝおこなしく成りて、いましむる事易し。

故に幼き時より早く教ふべし。もし教へいましむる事遅くして、悪しき事を多く見習ひ、聞習ひ、くせになり僻事出来て後、教へいましむれども、始より心にそみ入りたる悪しき事、心の内に早くあるじこなりぬれば、あらためて善に移るこゝ難し。」

これは幼児教育に就ての益軒の見解をまごめて述べたものである。教育は、子供の出来るだけ早い時代からはじめなければならぬ。癖が出来、習慣が成立した後で、矯め、直してゆく事は、教へる者にまつても教へられる者にまつても、甚しい困難を伴ふ。悪くなるのを待つて善くするよりは、素直なよい心ばえの中に、よきに導くのが秘訣であるといふのである。

「第一、いつはれる事、次に氣隨にてほしいまゝなる事を、早くいましめて必ずいつはり恣なる事をゆるすべからず。やんごごなき大家の子は、殊に早く戒しめ教へざれ

ば、年長じては勢強く位高くして、諫め難し。凡そ小兒のあしくなりぬるは、父母・乳母・かしづきなる人、教の道知らずして、其あしき事をゆるし、したがひほめて、其子の本性を害ふ故なり。或は暫く泣く聲を止めんとて、あざむきすかして姑息の愛をなす。其事誠ならざれば、則是偽を教ふるなり。又たはぶれに恐しき事をもを云聞かせ、よりくおごしいるれば、後に臆病の癖さなる。武士の子は、殊に是をいましむべし。幽霊、ばけもの、怪しく誠なき物語、必ずいまして聞かしむべからず。或は小兒の氣にさかひたる者をば、理をまげて小兒の非をそだて、そらうち(打つ真似)なごすれば、驕慢の心いでくるものなり。小兒をもてあそびて、我が心を慰めんが爲に、様々の詞にて、そびやかし苦め、いかり争はしめて、ひがみまがれる心をつけ、貪りねたむ心ざしを引出す。しかのみならず、父母の愛過ぐる故、あまえて父母を恐れず、兄を蔑にし、家人を苦め、よろづ恣にして人を侮る。いましむべき事をかへつてすゝめ、咎むべき事をかへつて笑ひ悦び、色々あしき事をもを見聞かせ、言ひならばせ、しならはせて、やうやく年長じ、智恵いでくる時に至りて、俄に始めていましむれども、其悪しきならはし、年と共に長じ、久しくならん染みて、本性三等しくなりにたれば、諫を用ひず。幼き時

に教なく、年長じて俄に諫むれども隨はざれば、本性悪しく生れつきたるこのみ思ふ事、いごおろかに、まごひの深き事ならずや。」

幼兒の養育に於て、第一に注意しなければならぬのは、人間一生の生活全體を見徹して、養育の指導精神を定めてからなければならぬ。其場其場の子供の氣持の動きや、利那くの大人のおもひつきで、出たご勝負の養育手段を弄ばしてはならない。恐るから吐り、喜ぶから媚びて、其場かぎりの取扱ひをしてゆく様では、到底子供の現在を子供の將來に結ぶ一貫した生長を、期待する事は出来ない。たごへ子供が泣かうご甘えようご、涙や笑ひにさそはれて、脆くも其場其場の子供の氣持に迎合してはならない。子供に迎合しきれない時になつて迎合を引つ込めて、改めて躡けようごしてもそれはもう遅い。世の中に生れつき悪いご思はれる子供があり、親も他人もそう云ひふらす子供もあるが、實をいふご迎合しきれなくなつた時に、これ迄迎合して來た罪を自ら欺く大人の誤りに他ならない。それ故に子供を養育するには愛がなければならぬが、愛しすぎてもならない。保護しなければならぬが、保護しすぎてはい。心についても同じ事である。

「凡そ小兒を育つるに、初生より愛を過すべからず。愛過ぐれば、かへりて子をそこなふ。衣服をあつくし、乳

食にあかしむれば、必ず病多し。衣を薄くし、食を少くすれば、病少なし。富貴の家の子は病多くして身よわく、貧賤の家の子は、病少なくて身強きを以て、其故を知るべし。小兒の初生には、父母の古き衣を改めぬひて、著せしむべし。衣のあたらしくして温なるは、熱を生じて病なる。古語曰く「襁褓論」に、凡そ小兒を安からしむるには、三分の飢寒をおおべしと云へり。三分は、十の内三分を云ふ。此意は、少しは喝し、少しは冷すがよしとなり。是古人小兒を保つての良法なり。」

それ故に、生れたての幼い子供から養育だけでなく教育についても、充分の注意をはらわなければならない。そしてその爲には、先づ乳母の選擇から氣を付ける必要がある。乳母は子供が目覺めてゐる間いつも付添ふ人であり、子供の生活の一番近い友達であるからである。子供にまつては乳母程大きな教育者はなく、乳母程大切な環境はないのである。教へることもない、又見せることもない、乳母の生活が、實はいつのまにか子供の生活そのものの中に、浸みこんでゆくものである。

「小兒を育つるには、前にも聞えつるやうに、先づ乳母かしづき隨ふものをえらぶべし。心穩に邪なく、慎みて言葉少なきをよします。わがしこく口き、偽りをいひ、詞多く、心邪にして僻み、氣猛く、恣にふるまひ、醜陋を好むを惡しとす。凡そ小兒は智なし。心も詞も

萬の振舞も、皆其かしづき隨ふ者を見習ひ、聞きならひて、彼に似するものなり。乳母・かしづき隨ふ人惡しければ、育つる子、それに似て惡しくなる故に、其人をよくえらぶべし。貧賤なる家には、人をえらぶ事難しといへど、此心得有るべし。況や位高く祿さめる家をや。」

乳母の選擇を重んじ、乳母からくる影響を大きなものに考へた益軒は、つまり子供の境遇を最も大きな教育と考へたのである。さうよりも、環境そのものが、子供の生活であるさへ考へて、生活それ自らにおいて、子供が自ら學ぶ影響を大きなものに見立てたのである。然し益軒は、乳母さか親さかいつた様な、人間的要素を含めての生活環境を、唯一の教育者として見たのではない。玩はない子供の生活に於てさへも、正しい筋目を立て、正しい理想を貫はせる様に、しなければならぬと考へたのである。この意味に於て益軒は、單なる環境主義者でもなく、自然主義者でもない。朱子學流の理想主義者であつた。

「凡そ小兒を育つるには、専ら義方の教をなすべし。姑息の愛をなすべからず。義方の教は義理の正しき事を以て、小兒のあしき事をいましむるを云ふ。是必ず後の福なる。姑息は、婦人の小兒を育つるは、愛に過ぎず、小兒の心に隨ひ、氣にあふを云ふ。これ必ず後の禍なる。幼き時より、早く氣隨をおさへて、私欲をゆるすべからず。愛を過せば、驕出來、其子のため禍なる。」